

班女詞章

登場人物

シテ・遊女花子
ワキ・吉田少将

狂言・野上宿の長
ワキ連・太刀持(吉田少将の従者)

シテ げにや本よりも定め無き世といひながら。憂き節繁き河竹の。流れの身こそ悲しけれ。

同音 分け迷ふ行へも知らず濡れ衣。野上の里を立出でて。野上の里を立出でて。近江路なれど憂き人に。別れしよりの袖の露。其儘消えぬ身ぞつらき。其儘消えぬ身ぞつらき。

野上宿||かつての中山道、現在の岐阜県関ヶ原町あたりにあった宿場町。

ワ・連 帰るぞ名残富士の嶺の。帰るぞ名残富士の嶺の。行きて都に語らん。

ワキ これは吉田の少将とは我が事なり。さても我過ぎにし春の頃東に下り。はや秋にもなり候へば。只今都へ上り候。

ワ・連 都をば霞と共に立出でて。霞と共に立出でて。暫し程経る秋風の。音白河の関路より又立帰る旅衣。浦山過ぎて美濃の国。野上の里に著きにけり。野上の里に著きにけり。

ワキ 急ぎ候程に。これははや美濃の国野上の宿に著きて候。いかに誰かある。ワキ連 御前に候。

ワキ この処に班女といひし女に契りしことのありつる。未だこの処に在るか急ぎ尋ね候へ。

ワキ連 班女の事を尋ね申して候へば。長と不和なる事の候ひて。今は此処には御座なき由申し候。

ワキ さては定め無き事ながら。若し其の班女帰り来る事あらば。都の伝に申し上せよと固く申し附け候へ。急ぐ間程無く都に著きて候。又宿願の子細有れば。これより直に糺へ参らうずるぞ皆々共仕り候へ。

シテ 春日野の雪間を分けて生ひ出で来る。草のはつかに見えし君かも。由なき人に馴れ衣の。日を重ね月は行けども。世を秋風の便りならではゆかりを知らする人もなし。夕暮の雲の涯に物を思ひ。上の空に憧れ出でて。身を徒に為すことを。神や仏も憐みて。思ふ事を叶へ給へそれ足柄箱根玉津島。貴船や三輪明神は。夫婦男女の語らひを。守らんと誓ひおはします。この神々に祈誓せば。などか験の無かるべき。謹上再拜。(カケリ)

糺||糺の森のある下鴨神社のこと。
春日野の雪間を分けて生ひ出でくる 草のはつかに見えし君かも||古今集壬生忠岑の歌
謹上再拜||神を拝む時に言う言葉。

シテ 恋すてふ。我が名はまだき立ちにけり。

同音 人知れずこそ。思ひ初めしか。

シテ あら怨めしの人心や。げにや祈りつつ御手洗川に恋せじと。誰か云ひけん空事や。されば人心。誠少き濁り江の。澄まで頼まば神とても。受け給はぬは理や。ともかくにも人知れぬ思の露の。

同音 置き所いづくならまし身の行くへ。心だに誠の道に叶ひなば。誠の道に叶ひなば。祈らずとも。神や守らん我等で。真如の月は雲らじを。知らで程経し人心。衣の玉は有りながら。怨有りやともすれば。猶同じ世と祈るなり。猶同じ世と祈るなり。

ワキ連 いかにか狂女。何とて今日は狂はぬぞ面白う狂ひ候へ。

シテ うたてやなあれ御覧ぜよ今までは。揺がぬ梢と見えつれども。風の誘へのば一葉も散るなり。適々直なるを。狂へと仰有る人々こそ。風狂

(伊勢物語六十五段)
心だに誠の道に叶ひなば 祈らずとも神や守らん||菅原道真の歌
という

恋すてふ我が名はまだき立地にけり 人知れずこそ思ひ初めしか||拾遺集壬生忠見の歌
御手洗川||下鴨社前の川。恋せじと御手洗川にせし御祓 神は受けずぞなりにけらしも

じたる秋の葉の。心も共に乱れ恋のあら悲しや狂へとな仰有りさむらひそ。

ワキ連 さて例の班女の扇は候。

シテ 現なや我が名を班女と呼び給ふぞや。よしそれとても憂き人の。形見の扇手に触れて。打置き難き袖の露。故事までも思ひぞ出づる。班女が班女が閨の中には秋の扇の色。楚王の台の上には夜の琴の声。

同音 夏果つる扇と秋の白露と。何れか先に起き臥しの床冷じや独寝の。寂しき枕して閨の月を眺めん。月重山に隠れぬれば。扇を挙げて之を喩へ。花琴上に散りぬれば。雪を蒐めて春を惜しむ。

シテ 夕べの嵐朝の雲。何れか思のつまならぬ。寂しき夜半の鐘の音。鶏籠の山に響きつつ明けなんとして別れを催し。せめて閨洩る月だにも。

同音 暫し枕に残らずして。また独寝になりぬるぞや。翠帳紅閨に。枕並ぶる床の上。馴れし衾の夜すがらも同穴の跡夢も無し。よしそれも同じ世の。生命のみをさりともと。いつまで草の露の間も。比翼連理の語らひ。その驪山宮の私語も。誰か聞き伝へて今の世まで洩らすらん。

同音 さるにても我が夫の。秋より前に必ずと。夕べの数は重なれど。あだし言葉の人心。頼めて来ぬ夜は積れども。欄干に立ち盡して。そなたの空よと眺むれば。夕暮の秋風。嵐山嵐野分も。あの松をこそは音づるれ。我が待つ人よりの音づれをいつ聞かまし。

シテ せめてもの形見の扇手に触れて。風の便りと思へども。夏もはや杉の窓の。秋風冷やかに吹き落ちて団雪の。扇も雪なれば。名を聞くも冷じくて。秋風怨あり。よしや思へばこれもげに逢ふは別れなるべし。その報なれば今更。世をも人をも怨むまじ唯思はれぬ身の程を。思ひ続けて独居の班女が閨ぞ寂しき。絵にかける。

同音 (序の舞) 月を蔵して懐に持ちたる扇。取る袖も三重襲ぞ。その色衣の。夫の予言。必ずと夕暮の月日も重なり。秋風は吹けども。荻の葉のそよとの便りも聞かで。

シテ 同音 鹿の音虫の音もかれが契。あら由なや。形見の扇より。

同音 形見の扇より。猶裏表有るものは人心なりけるぞや。扇とは空言や。逢はでぞ恋は添ふものを。逢はでぞ恋は添ふものを。

シテ 同音 いかにか誰かある。あの狂女の持ちたる扇見たき由申し取りて来り候へ。ワキ連 いかにか狂女。あのお輿の中より狂女の持ちたる扇御覧じたき由仰候。そと参らせ候へ。

シテ 同音 これは人の形見なれば。身を離さず持ちたる扇なれども。形見こそ今は仇なれこれ無くは。忘るる隙もあらましものをと。思へどもさすが又。

シテ 同音 班女が班女が閨の中には秋の扇の色。楚王の台の上には夜の琴の声。|| 和漢朗詠集 冬雪に載っている尊敬の句

同音 月重山に隠れぬれば。扇を挙げて之を喩へ。花琴上に散りぬれば。雪を蒐めて春を惜しむ。|| 和漢朗詠集 智者大師の句

同音 鶏籠の山 || 鶏が暁を告げる明け方の山

同音

添ふ心ちする折々は扇取る間も惜しきものを人に見することあらじ。
こなたにも忘れ形見の言の葉を。岩手の森の下躑躅。色に出でずはそ
れぞとも。見てこそ知らめ此の扇。

シテ

見てはさて何の為ぞと夕暮の。月を出せる扇の絵の。かくばかり問ひ
給ふは何のお為なるらん。

同音

何ともよしや白露の。草の野上の旅寝せし。契の秋は如何ならん。

シテ

野上とは。野上とは東路の。末の松山波越えて。帰らざりし人やらん。
末の松山立つ波の。何か怨みん契り置く。

同音

形見の扇こなたにも。

シテ

身に添へ持ちし此の扇。

同音

輿の中より。

シテ

取り出せば。折節黄昏に。ほのぼの見れば夕顔の。花を描きたる扇なり。

同音

此上は惟光に紙燭召してありつる扇。御覧ぜよ互に。それぞと知られ

同音

白雪の。扇の夫の形見こそ。妹背の中の情なれ。妹背の中の情なれ。